

大口町から生まれた クラフトビール開発秘話！



じめじめと蒸し暑い梅雨を乗り切ると、いよいよ本格的な夏が到来します。夏の暑さはつらいものの、ビール好きにとっては、汗をかいた後にいただく一杯は格別なものがありますね。

ところで、令和5年より大口町産のクラフトビールが発売されているのをご存じでしょうか。

発売当初は、ビールサーバーから注いだカップ入りでの販売でしたが、さらに試行錯誤を重ね、今年5月より満を持して瓶入りを発売。味もリニユアルし、口の中にふんわりと広がる豊かな旨味や、フルーティーな香りを伴った心地よい甘み、そして飲んだ瞬間のキレや、喉をとる時の爽快感が実現しました。

耕作放棄地を有効活用、農業法人の設立へ

そもそも大口でクラフトビールの



生産が始まったきっかけは、町内の農業法人の設立にさかのぼります。

446ヘクタールの農地を抱える大口町は、近年、他の市町と同様に、農業従事者の高齢化や後継者不足による耕作放棄地の増加が切実な問題となっています。対策を怠れば、10年後には全体の4分の1が耕作放棄地となるという試算も出ています。

この問題を解決するため、令和4年、町が発起人の一人となり「株式会社ユニバーサルファーム大口」が設立されました。「持続可能な農業の仕組み」を作り出すことを目標に掲げ、町、町内企業や事業所、商工会が力を合わせ、会議や視察を重ね、大口町ならではの 방법으로農地を有効活用し、そこから大口町オリジナルの商品を生み出せないかと知恵を出し合いました。

同社は、現在6名（アルバイト含む）が在籍。まずは農地を持ち主からお借りし、稲作に挑戦しました。コンバインなどの農業用機械を離農者のご厚意で譲り受け、田植え、稲刈りなどを経て、令和7年に初めて2040キロの米を収穫することができました。

また、同時に特産品の開発にも着

手。健康ブームで注目されているブルーベリーを生産し、そこからオリジナルのブルーベリージャムを商品化する計画です。

そして、近年若者や女性にじわじわと人気が高まっているクラフトビールにも目をつけました。クラフトビールは全国各地で「当地クラフトビール」が製品開発され、近年の夏の暑さも相まって地域のオリジナルの味で人気を獲得して地域おこしに一役買っていることが話題となっています。大口町でもビール用の麦を生産し、オリジナルのクラフ



大口町から生まれたクラフトビール

トビールを作ることとはできないかと検討を重ねました。

まずは大口町で収穫されるお米「あいちのかおり」のフレイバーと、同じく大口町で生産されたイチゴのフレイバーの2種のクラフトビールを令和5年に発売（この時点で麦は他地域のものを使用）。当初は小ロットで発注できる川崎市の業者に製造



を委託しました。しかし、小ロットであるためビールサーバーが必要な樽単位での生産になり、イベント会場等でカップでの提供で販売するしかありませんでした。

初めて販売したのは、令和5年3月に開催された大口町さくらまつりの中で開催された「にぎわい横丁」（キッチンカー広

場）です。「お米とイチゴのほのかな甘い風味が独特で、さわやか」と評判は上々で、にぎわい横丁の名物となりました。ただし、買い求めやすいギリギリの値段（500円）に設定すると利益が出ず、売れば売るほど赤字になりかねないことが大きなジレンマでした。またカップでの提供であるためイベント以外に販路が広がらず、収益化が大きな課題としてののしかかりました。

「この時期、やりたいことと収益化

のバランスがとても難しく、苦しい時期が続きました」と（株）ユニバーサルファームの古田政一社長。「一時のブームに乗るだけでなく、この先何年も続いていく商品として定着させるには、利益を出すことが必須条件。しかし、乗り越えられない壁はない、の精神でむしろ楽しんで知恵を出し合いました」

それから3年、さらに不屈の精神で試行錯誤を重ねました。今年に入り、川崎市の業者から近隣の一宮市の業者へ委託製造先を切り替え、大幅コストダウンに成功。また、待望の瓶入りも実現し、クラフトビールをお持ち帰りいただくことも可能になりました。

瓶入りクラフトビールは、5月22日のにぎわい横丁でデビューしました。330mlで1000円。ラベルの五条川と花見橋、そして町の花である桜をあしらったデザインは「ユニバーサルファーム大口」のロゴでもあります。クラフトビールに使う

麦と、今後ジャムとして販売予定のブルーベリーも米と同じく今年中に収穫し、計画は着々と進んでいます。「大口町で収穫した麦を使った真正銘の大口町産のクラフトビールが完成したら、自信作なのでぜひ多くの人に味わってもらいたい」と古田社長。「これから積極的に飲食店や小売店に売り込みをかけ、ゆくゆくは『大口町の名物』となることを目指します。未来に続いていく事業として安定させ、大口町の農地を守ることにもつながれば」と、さらなる飛躍が期待されます。

大口町発クラフトビールはまだやっと歩き出したばかり。みんなが大きく育てていけるといいですね。

